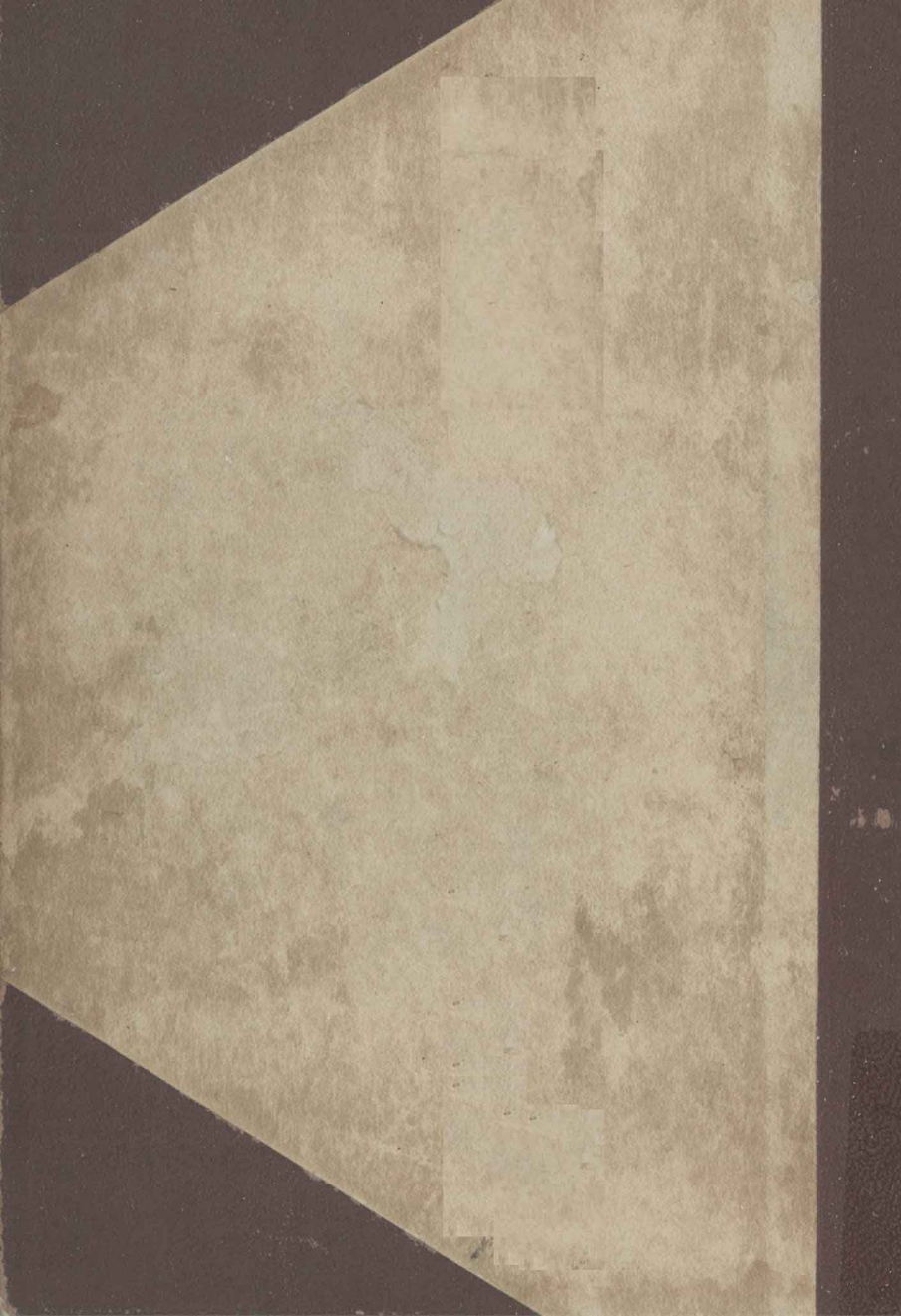
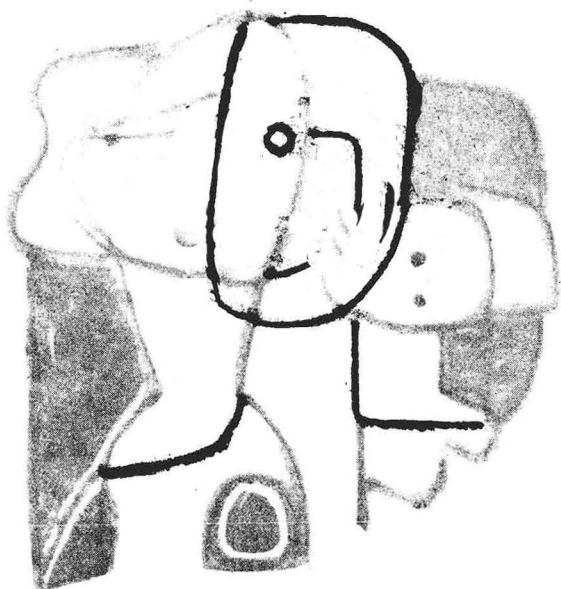




五
替
の

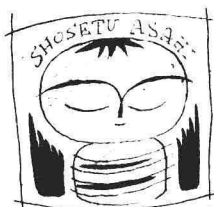
肖像



青春の肖像

定價 220 円

地方賣價 225 圓



昭和二十七年八月三十日 印刷
昭和二十七年九月五日 発行

看者藤原審爾

死行者 山田 静 郎

印刷者 興石 博

印刷所 統計印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ三四

發行所 株式會社 小說朝日社

東京都千代田区神田小川町一ノ一〇
電 神田(25) ニホミ・振替東京 二〇三九

電 神田(25) 二五五・振替東京 一八〇二七

目

次

青春の肖像

薊のお綱が歩いた道

危険な時間

ルイの言葉

77

113

131

わが戀は秘めたるまゝに

163

罪

な

女

193

春

日

閑

話

223

青

い

眼

の

猫

241

青
春
の
肖
像

日ぐれから次第に冷えこみ、その春の夜は雪になつた。

降りしきる雪が、廣大な櫻場家の蔭に蔽はれた洋館を白くつくんでいつた。

雪にふりこめられてゐるその洋館の、豪華な家具に飾られてゐる居間の、暖爐の前のアームチェアの上で、櫻場夫人は、まるで雪の降るやうにたえまなく、竹の長い編棒を動かしてゐた。ベルベットのガウンの膝の襷のうへで、白い毛糸の玉がくるりくるり廻つた。

夫人は、眞珠の首飾のうへの、その美しい顔をふとあげて、わづかにあけてあるカーテンの向ふの窓にふりかかつては解ける雪を見ながら、部屋隅のラチオから流れる低い音楽を聞きながら、満足な無爲の時間を、暫くもつた。それから——夫人は、ふたゝび毛糸を幸福さうに編みはじめた。

夫人は十九歳の時に兩親を失ひ、叔父の家へ引取られた。夫の英道にはじめて會つたのも、この銀行家の叔父の家であつた。冬のある日、叔父の家を訪問して來た英道が、手編の毛糸の手袋

をはめてゐた。従兄の朝太郎が、クラシックだとふきだした。英道は、はづかしがつて、あわてて學生服のポケットにねちこんで、辯解した。九十近い彼の祖母が編んでくれたのだから、しかたがないんだよと言つた。「おばあちやまの手袋」とみんなに愛稱されてゐたその手袋を、ある日、彼女があやまつてよこした。

京都育ちで、東京の地理に暗い英道に、井ノ頭へ行く地圖を描いてやつてゐる時のことだつた。頬と頬がすれあふばかりにのぞきこまれて、その狼狽で彼女はインキ瓶を返してしまつた。紺色のインキがテーブルに流れ、ひろがるのを、一瞬、彼がハンカチで押へた。ポケットからひきだしたそのハンカチと思つたのが、手袋なのであつた。

その日から、「おばあちやまの手袋」を人々は見ることが出来なくなつた。彼女は叔母に叱られ、英道の祖母にお詫びの手紙をかゝされた。英道の祖母からは、折返し、また新しいのを編むから心配に及ばないといふ、筆の手紙が來た。しかし、その後、新しい手袋を編む間もなく、英道の祖母は他界した。

夕方、雪になつて、夫人は、夫の誕生日の祝ひの贈物は、毛糸の手編の手袋に決めることを考へついた。その時の、娘時代へ若返らすやうなこの思ひつきへの感激が、ずつと毛糸を編む夫人の心につづいてゐた。

「おばあちやまの手袋第二世ね。」

小さくもれた夫人の聲が、雪の夜の閑靜な部屋を、ゆつくり流れた、暖爐の炎の音の中を、低いラヂオの音楽の中を。

その閑靜な氣配の居間へ、突然、激しいドアを開く音がひびき渡つた。それは、夫人に祕密の贈物を置く心を忘れさせずに充分な音であつた。

夫人は、はつと振り返り、驚いて叫んだ。

「まあ、あなた、どうなさいましたの？　どうなさいましたの、そんなお顔をなすつて？」

英道は、開け放つたドアの外に立ちはだかつたまゝ、夫人の叫びに應へようともしなかつた。憤怒、絶望、憎惡で、全身が沸り立ち、兇暴な行爲への衝動で、はげしく腕をふるはしてゐた。

夫人の美しい顔は、夫のその烈しい憎惡を感じ、不安と恐怖にひきつづていつた。

切迫した氣配の中で、廊下の英道は僅かに理性をとり戻し、カラーの間へ指を入れて、ネクタイをゆるめた。それで、彼は、はぢけさうな兇暴的な衝動を抑へた。つとめて冷靜に振舞ふことを必死にこゝろみながら、居間へ彼は入つた。ドアを閉めた。

夫人は、再び、叫んで立ちあがらうとした。

「あなた、いつたい、どうなさいましたの、どう？」

その夫人の聲は、かすれた。むろん、意志通り、椅子から夫人は立ち上ることも出来なかつ

た。不可解だが極めて烈しい夫の憎悪と憤怒に燃えた目に射すくめられて、椅子のうへで、蒼ざめうちふるへた。

英道は、ドアの前から、夫人を射すくめながら、よろめきながら、しかし一直線に夫人へ近づいていつた。めらめらと燃えしきつてゐる暖爐の炎を背景にした夫人へ、無言で、冷靜をみせるための侮蔑的な冷笑を無理につくり、ポケットから一冊の本をとりだし、夫人へ渡した。

手渡された本は、彼の偽の冷靜を見破つたやうに、夫人のふるへる手へ届かぬ前、彼の手から離れ、夫人の膝へ落ち、膝から床へ音を立て、落ちていつた。夫人の美しい肢の傍らに落ちて、裏返しになつた本へ、夫人のふるへる手が伸びた。伸びて届きかけた夫人の指さが、一瞬、はつと止つた。夫人は、漸く夫の憤怒の原因に氣づいた。どの女にも共通な狡智の鎧を、その切迫した時間の隙に、夫人は身につけた。

夫人は、少しぞんざいな身ごなしで、それを拾つて、膝にのせた。鹿皮のその表紙の肩にあつた、夫人自身の

青春の肖像

といふ文字から、夫人は故意に目をそむけながら言つた。

「——これは、昔のことですわ……あなたとわたくしの生活には、なんの関係もなかつたことですわ……」

その夫人の言葉には、偽りなかつた。夫人は英道と結婚してから、このうへなく英道を愛した。このうへなく貞淑な妻であつた。

英道は、しかし、その夫人の言葉を無視して、應へようとはしなかつた。夫人の手にその古びた寫眞帳が抱かれたことで、新しい嫉妬と憎惡をかきたてられ、居間の中を檻房の狂人のやうに、歩き廻つた。歩きながら、最も殘酷で致命的な報復の言葉を探しあせつてゐた。

やがて——そんな瞬間にいたつても彼は、恥を忘れなかつた。居間の片隅に置かれた電蓄の前に近づき、ダイヤルを廻した。

姦しいジャズの音が、高く、居間の中へひびきはじめた。居間にひびくジャズの音の中を、英道は横切つた。ピアノの横を歩き、夫人の前を過ぎ、暖爐のところから、また向きなほつて歩いて夫人の前を通り過ぎ、ピアノの横からまた戻つていつた。それを繰返しながら、英道は低いつとめて冷靜な他人じみた調子で口をきつた。

「わたしは、邪な氣持でそれを探し出したのではないことを、はじめに斷つて置きます。わたしは、明後日の誕生日に、わたしとあなたがとり交した手紙の一つを、席上で公開してほしいと、友人どもに強要された。その相談にわたしは、あなたの寢室へいつた。わたしたちの手紙の入つてゐる手筈を見つけて、ふと開けたのです、あなたがそのうち歸つてくるだらうと思つて。

……そこで、不幸にもそのあなたの戀人たちの想ひ出の寫眞ブックを、わたしは見つけさせられ

た。それは……わたしの全生涯の……最もみじめな時間でした。……」

暖爐の前で、激しく手をふつて、振返つた英道は、突然荒々しく悲痛に叫んだ。

「あなたはわたしを欺いた！」

鋭く胸を刺すやうなその聲で、夫人は目まひを感じながら、全身でその言葉を反撥して言つた。

「いえ、あなた！」

その反撥を、瞬間、押し潰して英道の憎惡にあふれた叫びが流れた。

「十五年もわたしをあなたは欺いた。十五年間も！」

叫んだ自分の言葉で、彼の興奮は一層あふられた。彼は、用意してゐた残酷な數々の言葉をさへ叫ぶぬまで、烈しく興奮した。滲んでゐる汗で光る顔が充血し、額へ血管が太く浮び出た。口をわくわく動かし、握りしめたこぶしをわなわな震はした。

「嗚呼、なんてわたしは愚かだつたのだらう！　なんといふ屈辱！　なんといふ悲惨！　とてもわたしは、こんなぶざまな生活に耐へられるものか！」

夫人は夫の激しい叫びをあびて、悲鳴のやうな聲で哭き出した。その夫人の聲が、虚偽のやうに、また一入惨忍な言葉を誘はずには措かぬやうに錯倒して、英道にひびいた。彼は、興奮の限界を一瞬超えて喚いた。

「あゝ、たつた今、出て行つてもらふ！　さうだ！　それが當然あなたがとらねばならぬ道だ！

この上、一分だつて、あなたを見てゐる我慢なんか出来るものか！ さあ！ あなたが來た時と同じやうに、無一物で、さあ出て行つてくれ！」

完全に彼は、興奮の限界を突き破つた。狂氣の狀態へ突入する代り、脳の血管を破つた。理想の女性を瞬間描きながら、心から、呪はしい目の前の妻を離別することを希ひながら、

「無一物で、さあ、出て行つてくれ！」

と叫びながら、突然、彼は、よろめいた。よろめく軀をふみとどまらうともせず、夫人へ憎惡の目を据ゑながら、そのまゝ、床へ倒れていつた。

顔を椅子の肘のうへの兩掌の中に伏せ、悲鳴のやうに哭いてゐた夫人は、生れてはじめてのその悲惨と途方の無さの中から、足もとにはげしく倒れた夫の軀の音で、引き戻された。

「あッ！」

と夫人は、一切の出來事を忘れて、夫の軀へしがみついた。抱き起した。揺すぶつて、

「あなた、あなた！」

とあわただしく連呼した。ぐたりとなんの反應もない。夫の軀の顔に刻まれた陰慘な憎惡を見て、夫人は、はつと不吉な豫感に襲はれた。はつと夫の左の胸へ手をさしこみ、夫人は息をとめた。夫人は、茫然と、暫く、心臓の鼓動の既に止つた胸へ手をあてゝゐた。その死が、納得出来るまで、可成りの時間が必要だつた。

臆て、死が、夫人に、名狀しがたい恐怖の瞬間を招いた。夫人は、突然、家中にひびきわたるやうに絶叫して、夫の軀をつきはなして立ち上つた。立ち上り、絶叫しながら、姦しく高まつて來たジャズの音の中で、意識を失つていつた。

2

廣い庭の傾斜を蔽つてゐる芝生が、息づくやうな緑になつていつた。

緑の芝生と花壇の中に、昨日から入つた老人とその息子の庭師の姿が見えた。

黒い喪服で一層あでやかな夫人は應接間の中から、うららかな春の光の中をゆるやかにうごく庭師たちの麥藁帽子を、水底の風景を見るやうに、あはく氣遠く眺めながら、計理士の齋藤の報告に耳をかたむけてゐた。

卓子の向ふの椅子に浅くかけた齋藤は、主従の關係以上に夫人の美しさに氣押されながら、相續のあらゆる法的な處置の終つたことを、恐縮した態度で報告をした。

「——で、奥様の御相續あそばす分は、動産不動産併せ六千六十三萬八千圓と相成りましてございます。御下命の通り、逗子のお別荘は鎌倉の櫻場の御前様の名義に、大阪の御別邸は、會社の寮にいたすやう手配いたしましたしてございます。こゝへ一覽表を作つてまゐつておきましたから、お暇の折、お目通しいただきたうございます。えゝ、御車のはうは現在の分を會社が使用いたし

まして、會社の方で一兩日中に新車を調達いたすと申してをります……」

書類を卓子の上へ置いて立ちあがつた齋藤を愛想よく夫人はドアのところまで送りだし、それから、書類を手にして、居間へ戻つて來た。

書類はあらためられもせず、ティテーブルの上へ投げだされた。夫人は急に虚脱したやうに、ぐつたり椅子へ軀をもたしかけた。

——あの夜、夫があつた死になかつたなら？

さうした一つの假定が、その夫人の心の中を霧のやうにゆるやかに流れて行く。しかし、夫人は、その假定に對して、なにほどの戰慄も感じなかつた。僅か二ヶ月あまりの日々の経過が、既に、過去を甘い追憶のヴェイルでつつみはじめた。數々のこまやかな交情の光景が、こんこんとよみがへり、夫人は、夫の愛を生前にも増して深く感じるにすぎなかつた。

夫人は目を閉ぢ、幽かに甘く呟いた。

「わたくしたち、ほんたうに心から愛しあつてゐたのだわ——」

それから夫人は、自分の獻身的なそれらの歳月に充分な満足を感じながら、いひしれぬ陶醉の底へと溺れていつた。

けれども夫人は、過去と現在とのけじめを忘却したわけではなかつた。目を閉ぢ、満足な陶醉のなかで、夫人はかすかに軀をうごかしては、椅子にあたる自分の軀の若さをはかつてゐた。四